

Hürthle Cell Tumor の二症例

昭和42年1月30日 受付

信州大学医学部丸田外科教室

広瀬 義明 佐藤 卓弥

Two Cases of Hürthle Cell Tumor

Yoshiaki Hirose and Takuya Sato

Prof. Maruta's Surgical Clinic, Shinshu University, Matsumoto

甲状腺の Hürthle Cell Tumor は、本邦では比較的稀であり^①、その成因並びに予後に関しては不明の点が少ない。丸田外科教室においてはすでに Hürthle 細胞腫瘍に関する報告^{②③}があるが、著者等も Hürthle cell adenoma の二例を経験したので追加報告する。

症 例

症例 I 65才、農婦

主 訴：前頸部の腫脹。

既往歴：特記すべきことなし。

現病歴：他人より右側前頸部の腫脹を指適され某医より甲状腺腫として当科に紹介された。

入院時所見：右側甲状腺に $3.6 \times 2.5 \text{cm}^2$ 大の結節を認め、弾性軟、表面平滑で移動性があり、右側頸部のリンパ節は触知しない。また圧迫症状、嗄声、甲状腺中毒症状等はない。検査成績では、貧血なく、血沈値1時間値 6mm 、PBI 4.3r/dl でいずれも正常である。

臨床診断：右単純性結節性甲状腺腫。

手術所見：腫瘍は甲状腺の右葉下極表層にあり、結合織被膜でよく被包されたクルミ大の結節で、周囲との癒着も殆んどなく容易に剔出し得た。剔出標本は、重量 8gr 、楕円形で、 $4 \times 3 \times 2 \text{cm}^3$ 、断面は充実性、淡赤褐色、弾性軟で、嚢胞変性、石灰沈着は認められない(写真I、II)。

組織学的所見：腫瘍の中心部は実質性で索状構造を示すが、周辺部では中等度の濾胞を形成しコロイドも認められる。上皮細胞は高度の好酸性を示し、エオジンに一樣に染まる胞体から成り、核は類円形で、ヘマトキシリンに淡染するものが多いが、時としてクロマチンに富む比較的大型の核も見られる。しかしながら、細胞異型、核分裂像等の悪性像は認められない。以上より Hürthle cell adenoma と診断した(写真III)。

術後の経過は良好で12病日全治退院した。

症例 II 38才、主婦

主 訴：前頸部の腫脹。

既往歴：34才の時右乳腺線維腺腫にて手術を受けている。

現病歴：約3ヵ月前より頸部の圧迫感を覚え、某医に甲状腺腫を指適され当科に入院した。

入院時所見：右側甲状腺に $2.2 \times 1.4 \text{cm}^2$ 大の結節を認め、弾性硬、表面平滑で移動性があり、頸部リンパ節は触知しない。圧迫感の他は、嗄声、甲状腺中毒症状等はない。検査成績では、貧血なく、血沈値1時間値 3mm 、PBI 6.2r/dl 、Triosorb Test 28.8% でいずれも正常であり、Scintigram では Cold nodule を示した(写真IV)。

臨床診断：右単純性結節性甲状腺腫。

手術所見：腫瘍は甲状腺右葉下極に埋没しており、拇指頭大で硬く、周囲との癒着は殆んどなく容易に剔出し得た。剔出標本は、重量 4gr 球形で $2.5 \times 2 \times 2 \text{cm}^3$ 、断面は充実性、褐色で、一部に嚢胞変性を認めた(写真V)。

組織学的所見：一般に小濾胞性のものが多いが散在性に中等大の濾胞もみられる。コロイドの形成は、前者ではあまりみられないが、後者ではよくみられる。濾胞上皮細胞は極めて強い好酸性を示し、胞体の境界は不鮮明である。核は小型で類円形乃至円形で、一般にクロマチンに富むが異型像はみられない。以上より Hürthle cell adenoma と診断した(写真VI)。

術後の経過は良好で9病日退院した。

考 按

甲状腺の好酸性細胞より成る腫瘍は、Baber^④、Hürthle^⑤、Askanazy^⑥、Langhans^⑦等によつて注目されていたが、1928年Ewing^⑧がはじめて Hürthle cell tumor と呼称してからこの名称が一般に用いられるようになった。本腫瘍は、大型で類円形乃至多角形の腫瘍細胞より成り、その胞体は微細顆粒状をなし

写真 I



写真 II



真写 III

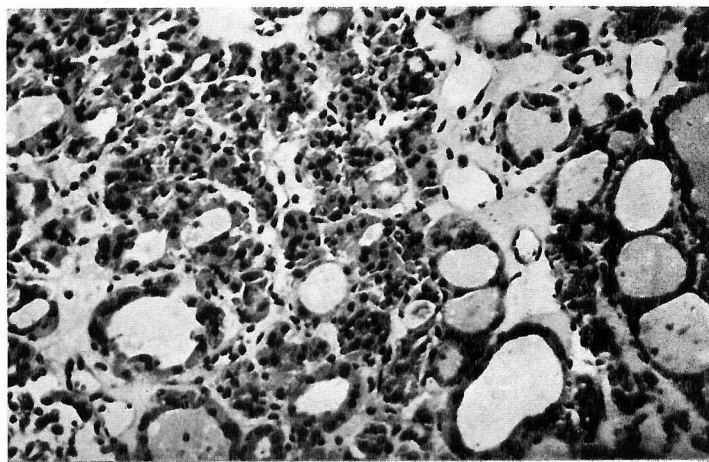


写真 IV

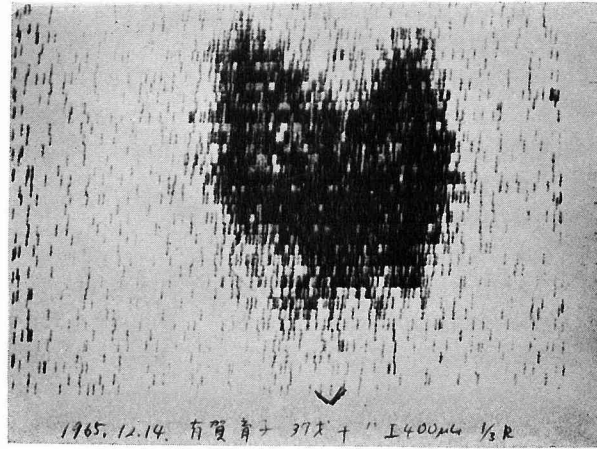


写真 V

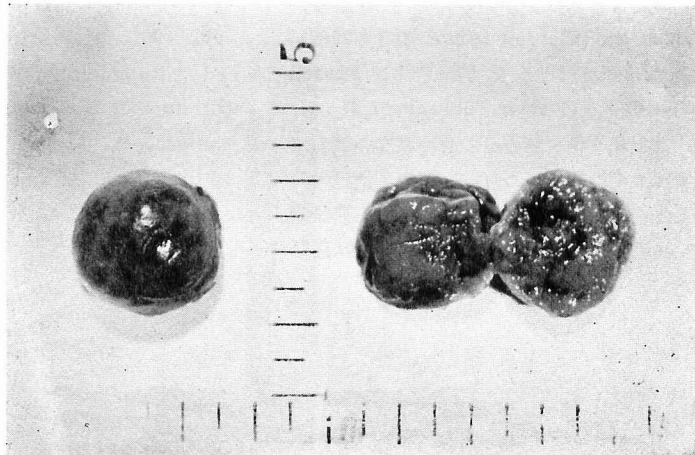
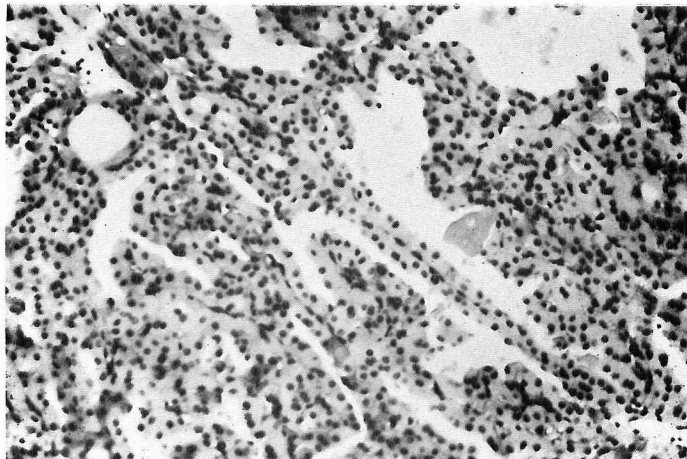


写真 VI



高度の好酸性を示し、核はヘマトキシリンに濃染し、時として Pyknose に陥つていることもある。これらの腫瘍細胞はしばしば索状に排列し、間質は血管と少量の線維成分より成り、一見肝細胞に類似した形態と排列を示し、濾胞腔を形成することは稀でコロイド形成も少ない。この好酸性細胞の起源については諸説があるが、今日では、甲状腺濾胞上皮の変化によつて発生するもので、一種の退行変性とみなされている。教室の飯田^③は、単純性甲状腺腫の結節の一部に好酸性細胞の集団を認め、非好酸性の腫瘍細胞から好酸性細胞に至るまでの種々の移行像を認めているが、これらの所見は甲状腺上皮細胞が何らかの原因により性状を変えたことのうらづけとなるものである。Hamperl^④はこのような上皮細胞の変形は、種々の器管の上皮細胞及びそれらの腫瘍に見られるとし、Onkocytoma なる名称で総称し、その腫瘍性を強調している。

本腫瘍には良性のものと悪性のものがあり、Horn^⑩は75例の Hürthle cell tumor のうち22例が癌で、そのうち10例が死亡したと報告し、Frazell and Duffy^⑪は40例の Hürthle cell cancer のうち、骨転移7例、肺転移6例を認めその悪性を強調している。本邦では大沼の集計によれば44例中7例(16%)が悪性であるという。著者等の症例はいずれも典型的な Hürthle cell adenoma の像であつて予後は良好

と思われる。

むすび

著者等は丸田外科教室において経験した Hürthle cell tumor の2例を報告した。組織学的所見には悪性像はなく、Hürthle cell adenoma の像を示していた。

文 献

- ①大沼雅弘・他：癌の臨床，11：101-104，1965
- ②篠原光男：信州医誌，9：900-904，1960
- ③飯田 太：信州医誌，13：391-398，1964
- ④Baber, E. C. : Phil. London, 116 : 557-568, 1877
- ⑤Hürthle, K. : Arch. Ges. Physiol., 56 : 1-44, 1894
- ⑥Askanazy, M. : Deutsches Arch. f. Klin. Med., 61 : 118-186, 1898
- ⑦Langhans, T. : Virchows Arch. f. Path. Anat., 189 : 69-156, 1907
- ⑧Ewing, J. : Neoplastic Disease, ed. 3 Philadelphia W. B. Saunders Co., 1928
- ⑨Hamperl, H. : Cancer 15 : 1019-1027, 1962
- ⑩Horn, R. C : Cancer 7 : 234-244, 1954
- ⑪Frazell, E. L. and Duffy, B. J. : Cancer 4 : 952-956, 1951